

2013.3/23-24 関西理学療法学会 一泊研修会 『研究から考える理学療法技術』

ナイトセミナー 「正しい肩甲骨上腕リズムを作るために」

第一岡本病院 リハビリテーション科 福島 秀晃・三浦 雄一郎

肩甲骨上腕リズムとは、1934年 Codman が上肢挙上に付随して肩甲骨が回旋する連動現象を scapulo-humeral rhythm と名付け、1944年 Inman によってこのリズムの研究が成された。Inman は setting phase の概念や上腕骨の動きに対する肩甲骨の動きが 2:1 という一定の度合いで動いていることを報告した。その後、様々な諸家により肩甲骨上腕リズムに関する研究・報告が成されてきたが、Inman が報告した 2:1 が通説となっている。

一方、肩甲骨上腕リズムという概念を臨床ではどのように活かしているのでしょうか？肩関節疾患症例の上肢挙上を観察すると肩をすくめながら上肢を挙上する症例を観察する。動作観察上、2:1 という肩甲骨上腕リズムが破綻しているようには確認できても客観的にはどのように示しているのでしょうか？また、治療へはどのように展開させているのでしょうか？

我々は肩関節に関する基礎研究として上肢挙上動作（肩関節屈曲・外転運動）時の肩甲骨帯動態分析と肩甲骨・肩関節周囲筋の動作筋電図による筋活動パターンについて報告してきた。肩甲骨上腕リズムの概念では屈曲・外転において上肢挙上方向の違いによるリズムの相違は無いとされているが、我々がおこなってきた座標移動分析による検討では肩甲骨の上方回旋角度変化に相違は無いが、肩甲骨の上方回旋の運動様式は異なっていた。肩甲骨の上方回旋の運動様式が異なれば当然、肩甲骨周囲筋群の筋活動パターンも異なる。本セミナーではこれらの基礎研究をあらためて報告するとともにこれらの基礎データと肩関節疾患症例とを比較し、治療方針の展開について考察していく。

また、具体的な治療方法として我々が着目している治療肢位（背臥位、側臥位など）の変化による上肢挙上運動での筋電図学的な報告もおこない、肩関節疾患症例への肩甲骨上腕リズムへの改善の取り組みの一部について紹介する。

本研修会のテーマは『研究から考える理学療法技術』である。臨床での素朴な疑問や着眼点を持ち、それらが研究テーマとして成り立ち、追求していく知的好奇心が重要である。そして研究結果を臨床へ還元していくことが理学療法技術の向上へつながると考える。理学療法技術は一朝一夕では成り立たない。臨床での素朴な疑問を大切にし、その疑問を同僚などとディスカッションし、継続していけるような環境づくりも必要である。